

**第 31 回
あ か つ き 賞
受賞作品集**



**2021 年 3 月
上 林 暁 顕 彰 会**

「あかつき賞」について

黒潮町の生んだ作家、上林暁先生の業績を顕彰するとともに、本町の教育文化の発展を願って、平成元年（一九八九）「上林暁顕彰会」を結成し、様々な活動を行っています。

その活動の一環として平成二年度より、町内小中学生の作文を対象に「あかつき賞」を授与しています。

優秀作品は、各学校の先生方のご協力を得て厳選された応募作品の中から、上林暁顕彰会の選考委員が各学年一点ずつ選びました。

本賞が町民の間に上林暁先生への関心を高めるとともに、地域の教育文化の振興に大いに役立つことを確信し、期待しています。

第三十一回「あかつき賞」受賞者名

学年	受賞者名	学校名	題名	指導教員
小学一年	石橋 愛海	南郷小学校	おとうとのおせわ	曾根 潤子
小学二年	梅澤 陽日	拳ノ川小学校	はじめてのくぎぬき	平林 美和子
小学三年	辻 心々絆	佐賀小学校	チョウを育てて	門田 博人
小学四年	生駒 賢太郎	伊与喜小学校	もちつき	武政 恵子
小学五年	川村 咲笑	田ノ口小学校	巻き寿司作り	曾根 健介
小学六年	村上 潤弥	南郷小学校	ふるさとの海や川を守りたい	青木 純子
中学三年	明神 心嶺	佐賀中学校	どんな人にも自分の意志で生きる権利がある	杉本 理砂

目次

おとうとのおせわ	石橋	愛海	1
はじめてのくぎぬき	梅澤	陽日	5
チョウを育てて	辻	心々絆	10
もちつき	生駒賢太郎		15
巻き寿司作り	川村	咲笑	19
ふるさとの海や川を守りたい	村上	潤弥	24
どんな人にも自分の意志で生きる権利がある	明神	心嶺	32

おとうとのおせわ

南郷小学校 一年 石橋 愛海

夕がたになったら、おとうとのおがいつもなきます。

だから、わたしは、おかあさんのために、だっこをしてたおをなきやませます。

でも、ベッドにおろしたらすぐなくから、ずっとだっこしています。

くびがすわっていなかったときは、くびもささえないといけなかったから、たいへんでした。うでがいたくなります。たおのあたまのあとがついたこともあります。いたいなあとおもいながら、それでもだっこをしています。

はやくねてくれないかなとか、夕がたになきわすれたぶんはよるなくんだらうなとかおもっていました。

でも、十ふんぐらいゆらゆらしているとねるので、ベッドに下ろしてもだいじょうぶだから、わたしはほっとします。

いまは、もうくびがすわったから、たいへんじやなくなりました。がくっとしなくなってよかったです。

よるはねるのに、夕がたになったらすごく大きなこえでなきます。はなをまつ赤っかにしてないています。

おとうさんがかえるのがおそくなるから、おかあさんはこまります。だっこベルトでたおをだっこしたままりようりをしていました。おもそうなのに、あんなにはやいうごきをしてて、おちないのかなとおもって見ていました。

わたしは、しゅくだいにしゅうちゅうできないから、おかあさんがおろしたときに、だっこしてゆらしながらしゅくだいをします。けいさんカードとか、本よみとかしていたけど、まだ、たおがなきます。また、わたしはだっこをします。



ごきげんがいいときは、おとうとがわらうときがあります。すごくかわいいです。

ぬれたタオルを、たおのかおに、すぐはやくぺたぺたとやったり、わきとかくびとかをくすぐったりしたら、おかあさんのかたにくつつくようにしてわらいます。

おかあさんが、ふとんでたかいたかいをしてもわらいます。

わたしは、おかあさんとおとうさんより、たおがわらったところをいっぱい見えています。

一ばんすごかったことが、くびがたつかのれんしゅうのとき、わらっていたことです。たおのガチャガチャするところに毛糸を足にむすんだとき、うれしそうでした。手でわたしがいろんなかたちをつくったときもわらっていました。なきながらわらうときもありました。たおがわらうとすごくかわいいです。みんながわらったときもわらいます。

たおがわらったときおかあさんをよんだりします。そしたら、おかあさ



んは、

「かわいいね。たおすごい。」
といいます。

わたしも、学校のこととはなしたので、たおが、おふろに入って、パジャマにもきがえて、ミルクものでねたら、本をよんだり、学校のはなしをしたりします。おかあさんにかえるときのことはなすと、

「そうなんだ。」

ときいてくれます。

わたしは、そのじかんが一ばんほつとします。

はじめてのくぎぬき

拳ノ川小学校 二年 梅澤 陽日

大みそかに近い日の朝、外に出てみたら、母ちゃんが足で木をおさえて、何かを引っばっていました。

「何しようが。」

と聞くと、ふりむいて、

「くぎぬき。」

って言いました。おもしろそうだと思って、

「やらせて。」

と言ったら、

「これでやりや。」

って、そこにあったボールをわたしてくれました。てっせいでくぎを引き



ぬく所がついていました。いがいとおもかったです。

母ちゃんは金づちで、ぼくはくぎぬきせん用のボールをつかつて、くぎをぬきました。

母ちゃんが、

「台所にあるびんをもってきて。」

と言ったからとりに行つて、くぎぬきの場所におきました。これまでに母ちゃんがとつたものをびんに入れると、ちよ金ばこにお金を入れるみたいな音がしました。

まずは、小さい木にささっているくぎをぬきました。長いのもあつたけど、みじかいくぎの方が多かったです。ボールのブイのあいだに、くぎの一番上の丸い所をひっかけて、ぐいぐいっと引っぱりました。キュツとか、ギュツとかいいました。

つぎには、大きい木が来て、くぎも長くてぬくのも大へんでした。長いとまがつたりするし、さい後にとるときにぐりぐりしないと引きぬけない



からです。ボールで引っぱったけどぬけなかったから、母ちゃんにやってもらいました。母ちゃんの金づちでもグツグツと引かないととれませんでした。

昼も食べて、それからもやって、夕方でもやりました。くぎをぬきようわけは、リフォームの時外した木ざいを、ばあちゃんがチェーンソーでたきぎにするためです。くぎがあつたら、チェーンソーで火花がちったり、はのぎざぎざがつかいものになります。

つぎの日もやって、けっこう多くぬきました。やってるときにぎんちゃんが出てきて、

「何しゆうが。」

と聞かれたから、

「くぎぬき。」

と答えました。でも、気にせず、くぎをぬきました。ぎんちゃんは、自てん車で帰って行きました。びんにもいっぱいくぎが入ったから、新しいび

んにしました。

また、つぎの日もしました。その日は、家のはしらくらい太い木にくぎがあつて、つかれました。太くて長いくぎばかりでした。くぎが長いからまさつも長くて、ぬくときにまさつで一しゅん、たき火のにおいがしました。

こしまげの体せいでずっとやっていて、こしがいたくなりました。そして、じいちゃんに来て、じいちゃんのやり方をやっていました。ボールをおいちよつて、金づちでボールのまん中をうっていました。カンカンと三回くらいで、だいたいのくぎはぬけました。すごいと思って、「おー。」

と、小さく言いました。母ちゃんもぼくも、そのやり方でやりました。楽しくなりました。

ぬけるのが気もちよかったです。

ぼくがぬいたくぎは、ぜんぶ合わせたらりよう手で山もりぐらいはあり



ます。

三日間もれんぞくしてくぎをぬいた自分に、

「こんなにしゅう中してしごとをして、すごい。」

と、言ってやりたいです。はじめて三日間も母ちゃんといっしょにはたらかしました。そのあいだは、母ちゃんがやさしかったです。

めったにほめてくれんけど、

「ありがとう。」

も、言ってくれました。ちよつとてれました。

チョウを育てて

佐賀小学校 三年 辻 心々絆

三年生の理科の時間に色々なチョウを育てました。モンシロチョウ、ツマグロヒョウモン、アゲハチョウです。三しゅるいのチョウを育てたことで、はつ見がありました。みんないっしょうけんめい育てました。そして、弱っていたチョウもいたけど、みんなで、とばしてあげました。

さいしよに、モンシロチョウのよう虫の青虫を育てました。キャベツやブロッコリーを食べて、どんどん大きくなりました。そして、朝学校に来て教室に入ると、ここちくと、おうせいくんが、

「ここなちゃん、チョウになつちよう。」
と言いました。私は、

「えっ。」



と言ってケースの所に行きました。見てみると、さなぎが、モンシロチョウになっていました。私は、

「やっぱ、うそやろ。」

と言ってとびはねました。とてもうれしかったです。後からみんなに、

「さなぎからモンシロチョウになっちゃおうで。」

と言いました。みんなも、

「えっ、うそ。」

と言って、見ていました。

三時間目にもんた先生が、

「今朝、チョウになったあの子をにがしましょう。」

と言いました。私はがっかりしたけどベランダからとばすと、風におされながら元気にとんでいきました。みんなが、

「うおお。」

と言いました。ひなたちゃんたちが、



「元気でねえ。バイバーイ。」

と言って、みんなで見送りました。

次は、ツマグロヒョウモンを育てました。ツマグロヒョウモンのような虫は、トゲトゲしていて黒いのでクロモンとよんで育てました。朝、教室に入るとすぐにクロモンを見に行きました。見るとさなぎになっていました。その時私は、

「さなぎになっちゃおう。」

と言いました。よく見ると、せなかがキラキラしていてきれいでした。そして、十日ぐらいたつと、チョウになりました。その日は雨だったけど、二十分休みにみんなだとぼしてあげました。雨の中を元氣にとんでうれしかったけど、おわかれが少しさみしかったです。

さいごに、アゲハチョウを育てました。アゲハチョウのような虫は、今までよりも、大きくてふとっているよう虫でした。そして、アゲハチョウがさなぎになりました。でも二ひきいたはずなのに一ぴきのさなぎは見つか



らないのでみんながっかりしていました。でも、次の日に、教室でここちくんと、アゲハチョウを、さがしました。すると、南の方のまどでさなぎになっていました。よかったなあと思いました。そして、アゲハチョウを、にがす日が来ました。これでさいごのチョウだから心をこめてとばしました。みんながさわりすぎて、ちよつと弱っていました。それでも、ちゃんと空にとんでいきました。私は、とてもうれしかったです。

色々なチョウを育ててみて、それぞれもようはちがうけれど、育ち方には、にていると分かりました。それぞれ色や形がちがっていいし、みんないっしょうけんめい生きていました。そのチョウの命は一つだけだから、とてもとても大切な命だということがわかりました。

私たち、三年生も、身長や体じゅうかみのけが人によっていろいろちがっています。

人それぞれのちがいがあるけど、みんなそのままでもいいということを受けました。これからも、生き物や人の命を大切にしていきたいです。そし



て、
今まで育てて来たチヨウたちが元気かどうか見てみたいです。

もちつき

伊与喜小学校 四年 生駒 賢太郎

冬休みに、おばあちゃんともちつきをしました。

朝の九時ごろ家の中でゲームをしていたら、

「もちつくけん、見にきいや。」

とおばあちゃんによばれたので、すぐに着がえていな屋へ行きました。

いな屋の中へ入ったら、ゴトンゴトンと大きな音がして、電動のもちつき機が一人でもちをついていました。おばあちゃんは、かまどの上にもち米の入ったなべを置いていました。なべのふたのすき間から、いっぱい湯気が出ていました。

もちがつきあがったら、おばあちゃんが、もちつき機の中で回っているおもちを両手で取って木のたらいに入れました。熱そうだったけどおばあ

ちゃんはこらえていました。

それから、おばあちゃんが、ぼくの手のひらにのるくらいの大きさにもちをちぎってくれて、ぼくにわたしてくれました。ぼくは、初めにおにぎりみたいにもちを丸めて、手のひらでちよっとおして中にあんこを入れしました。あんこが出てこないように丸くしました。ぼくは、次々におもちを丸めていきました。おもちが熱かったです。おばあちゃんがバケツに水を入れていたので、手で水をすくって洗いました。気持ちよくなったし、手にくっついてたおもちやこなが取れました。

今度は、ご先祖様にまつるもちを丸めました。おばあちゃんが、

「ご先祖様用のおもちがあんこ入れんがで。」

と言ったので、ぼくは、

「なんで。」

と聞きました。おばあちゃんは、

「ご先祖様は、あんこがきらいやけん入れんがで。」

と教えてくれました。

おばあちゃんが、もちつき機から出したもちを、ぼくが両手でちぎりしました。とても熱かったです。でも、なれないかんと思つて、がまんしました。あんこなしのおもちをどんどん丸めました。

次は、ごはんのにんじんいもが入ったおもちをつきました。おばあちゃんがきりぼしもちと教えてくれました。

きりぼしもちをもちつき機から出す時に、おばあちゃんの指の間から、おもちがのびてテーブルにくっついてしまいました。おばあちゃんは、急いで木の箱におもちを入れました。でも、テーブルに落ちたおもちがくっついて固くなったので、おばあちゃんは、きりぼしもちをつきなおしました。今度は、成功しました。

そして、きりぼしもちを丸めました。やわらかくて丸めやすかったです。あんこも入れました。

全部丸め終わったら、おばあちゃんが、



「ありがとう。後でおもちを持って行くけんね。」
と言いました。ぼくは、

「うん。」

と言って家の中に入りました。おもちをいっぱい作れて楽しかったです。

おやつの中に、あんこの入った白いおもちを一こ食べました。ちょうどいい甘さでおいしかったです。食べすぎたらおなかがいなくなるので一こで十分でした。

巻き寿司作り

田ノ口小学校 五年 川村 咲笑

十二月三十一日、朝ご飯を食べていると、おばちゃんが、「今日は、おばあちゃんといっしょに巻き寿司作るけんね。」と言ったので、私は、

「えー。」

と言いました。めんどくさいと思ったからです。それにいとことゲームをしたかったのでやりたくなかったからです。

朝ご飯を食べて着がえをして、いとこといっしょに宿題をしていると、おばちゃんが、

「時間になったけん、そろそろ行こうか。」

と言ったので、庭先にあるおばあちゃんの家に行きました。

「もう作れる。」

と聞くと、

「うん。」

とおばあちゃんが言ったので、さっそく作り始めました。

まず、二つのすいはんきでたいたご飯を大きなたらいにパカッとうつしました。私といとこがほぐしていると、おばあちゃんが、

「切るようにしてほぐさないかん。」

と言つて、お手本を見せてくれました。私といとも、まねしてほぐしました。

次に、酢と、魚をくずした物と、ごまと、さとうと、塩をまぜた物をほぐしたご飯にぐるっとかけました。そして、ほぐすときと同じように切るようにして全体に味がいきわたるようにまぜました。

ご飯の湯気といっしょに酢のにおいが鼻にツーンとききました。

小さなお皿に酢飯を少しとつて、みんなで味見をしました。私といとこ

たちは、

「いいんじゃない。」

「おいしい。」

と言ったけど、おばあちゃんだけは、

「ちよつとうすいことない。」

と言ったので、酢をもう一回ぐるっとかけて切るようにしてまぜました。もう味見はしませんでした。

テーブルにたまご焼き、こんぶ、のり、ごぼう、にんじん、かにかま、えびフライ、レタス、きゅうりがならんでいます。

「おっ、えびフライがある。」

と、うれしくなりました。

私といここはたまごの巻き寿司を作ることになりました。

まず、長方形の巻きすを横むきにおいて、たまごをたてにおきました。手に酢をつけて、酢飯を片手にのるくらいすくってたまごにのせました。



形を整えて、巻きすぎゆっとおさえました。たまごが破れないよう力かげんに気をつけました。一つ目はむずかしくて時間がかかったけど、二本三本とやっているうちに慣れてきました。今度は私がいここに教えました。教えるのはむずかしかったけれどいともきれいにできました。でもいとは二本でいやになったので残りは私が巻きました。たまごは二十本ぐらいできました。おばちゃんやおばちゃんが作ったのを合わせると全部で五十本ぐらいできました。私が、

「おいしそうやね。」

「思うたよりきれいにできた。」

と言うといとこが、

「うん。」

「そうやね。」

と言いました。

私はおばちゃんに、



「来年はこんぶ巻きとかのり巻きも作りたい。」
と言うと、

「そうやね、できたらいいね。」
と言いました。

夜はおばあちゃんが切ってさわちにもりつけてくれました。家族といとこやおばちゃんといっしょに食べました。たまご巻きは人気ですぐなくなりました。姉ちゃんが、

「おいしい。」

と言って食べてくれました。酢飯もちょうどいい味でおいしかったです。自分が思っていたより楽しかったので、来年はもっときれいにできるようにがんばりたいです。

ふるさとの海や川を守りたい

南郷小学校 六年 村上 潤弥

ぼくの家の近くには、猿飼川というきれいな川が流れています。ぼくが川釣りを始めたのは、小学校一年生のころからです。最初はハヤンボ釣りから始めました。

ハヤンボの釣り方は、竹竿に釣り糸とうきと釣り針がついたしかけで釣ります。最初は中村の釣り具やで五百円くらいで買っていました。釣竿のしくみが分かってきだすと、自分で作ってみました。家の前にある竹林から、細くてじょうぶそうな竹を選んでノコギリで切ります。竹の葉っぱをおとして、タオルで竹に付いているちくちくのとげをきれいに取り除きます。二メートルぐらいの竹竿の先に、糸を結びつけ、竿と同じ長さに切ります。最後に、糸の先からうきどめを通してうきをつけ、糸の先

に針を結べば完成です。

よく釣れるポイントは、草のしげみです。ぼくは、ポイントめがけて、岸の上から竿をふります。糸は空に向かって高く飛び、ポチャンと川に落ちます。ぼくは、うきがしずんだ時あわせやすいように、竿を片手で持ちます。そして、じつとうきを見ます。魚が食いついたとき、魚が暴れるのと同時に、うきも暴れ始めます。

(やっときた)

ぼくは、おもいつきり竿をふりあげます。だいたいハヤンボが釣れるけど、時には、コイが釣れることもあります。ぼくがこれまで釣ったハヤンボで、一番大きいのが二十三センチメートルです。コイも四年生の時、一回釣ったことがあります。コイを釣った時はとてもうれしかったです。友達や兄弟にも言いました。お母さんにも見せたけど、コイはどろをすっていて臭くておいしくないのにがしました。

釣りにはまっているのは、ぼくだけではありません。弟や学校の友達な

ど、みんな釣りにハマっていて、休みの日には自転車で、ぼくの家の近くの川に釣りに来ます。

ぼくは、六年生になって海釣りも始めました。冬休みも終わる一月五日に弟が、

「久しぶりに海釣りに行きたい。」

といい出したので、友達をさそって上川口漁港に釣りに行きました。

とうなくんとこたろうくんは、

「ルアーだけで釣っちゃる。」

と言ってルアーしか持ってきていませんでした。ぼくは最初からエサ釣りをしようと思っていました。それは、あまりルアーで釣った経験がないからです。だから、エサはオキアミとキビナゴを持っていきました。

上川口漁港には、お母さんの車で行きました。車が上川口漁港のちゅう車場にとまると、ぼくは、エサの入ったクーラーボックスと釣り竿を持って、堤ぼうに走って行きました。弟達は、ぼくより先に走っていました。



堤ぼうに着くと、みんながいつせいにルアーを投げました。ぼくは最初は、ルアー釣りをしようとは思っていませんでしたが、みんなのやっている姿を見るとやってみたくなりました。魚の形をしているぼくのルアーは海の中にしずんでいきます。下に引つかからないように、急いで巻きます。投げて巻くのを十分くらいくり返していたのに、全然アタリがきません。ぼくはみんなに、

「穴釣り行かん。」

とさそいました。でもみんなに、

「あきらめ、早っ。」

と言われました。ぼくは、

（穴釣りで絶対釣ってきちやる）

と思いながら、テトラポッドがある方に歩いて行きました。

穴釣りをするときのコツは、テトラポッドとテトラポッドの間を見つけ、その中に、糸がからまないように垂直に糸をたらすことです。もう一

つのコツは、できるだけしかけのブラクリを深いところまでおとすことです。

ぼくは、まずいつもたくさん釣れるポイントに行ってしかけを落としました。堤ぼうと堤ぼうの小さなすきまに、糸がからまないようにゆっくり落とします。ブラクリが海底まで落ちると、リールから糸が出なくなりま

す。そのタイミングで、魚が食いつきやすいようにリールを巻きました。しばらく待ってもアタリがきません。

（冬はおらんがかな）

と思いました。なかなかあきらめきれません。エサをオキアミからキビナゴに変えることにしました。カサゴなどの根魚はオキアミよりキビナゴの方が食べなれているからです。ぼくは、テトラポッドとテトラポッドの小さなすきまを見つけ移動しました。

（ここならいそう）

と思いながら、しかけをおとして待ちました。ツンツンと竿を持つぼくの



手にしん動が伝わると、そのしゅん間いきなり竿がグイーンと曲がりました。

（きたっ！）

ぼくは、竿をおもいつきり高くふりあげました。魚が暴れているのが手に伝わってきます。リールを巻く手がすごく重くなったように感じました。ぼくは、糸の先には何がかかっているんだろうと期待しながら、引きあげました。ところが、海面からあがってきたのは十センチメートルくらいの小さなカサゴでした。小さかったけど、久しぶりに釣れたので、すごくうれしく感じました。それに冬でも魚がいたんだ！とちよつと安心することができました。そのカサゴはあまりにも小さくてかわいそうだったので、にがすことにしました。

もう一度ブラクリを落として、待ちました。するとすぐ、ツンツンとぼくの手にしん動が伝わってきて、竿がグイーンと曲がりました。

（またきたっ）

ぼくは、竿をふり上げてリールを巻きました。

リールを巻くのが、さつき釣れたときよりも軽く感じました。

ぼくは、ゆっくりゆっくり糸を巻き上げました。糸の先には、茶色の小さなカサゴがかかっていました。じゅんのすけ君が、

「それ、さつきにがしたやつやん。」

と言いました。

(同じやつが釣れたがか)

とじゅんのすけくんといっしょに笑いました。そのあとも、同じ場所で三びき釣ることができました。

堤ぼうとテトラポッドの間にブラクリを落とそうとしていたとき、遠くの堤ぼうでルアー釣りをしていたとうくんやこたろうくん達が海を指さしながら、すごく大きな声で、なにか言っているのが聞こえました。ぼくは、釣竿とクーラーボックスを持ってそこへ走って行きました。

そこには、ウルメイワシの大群がいました。数えきれないくらいのウル



メイワシがきらきらかがやきながら、空に向かって高く飛んでいました。そのウルメイワシは、空に向かって飛びながら、遠くの方へ行ってしまう。ぼくは、そのきれいな姿に見とれてしまいました。

ぼくは、こんなにきれいで魚がたくさんいる海を、絶対に大切にしないといけないなと思いました。

本当は、釣った魚はもって帰って食べるけど、ぼくが釣った魚はすごく小さかったので全部海にがしました。大きくなってまたこの海で釣りたいからです。

ぼくは、この黒潮町の海が大好きです。

どんな人にも自分の意志で生きる権利がある

佐賀中学校 三年 明神 心嶺

私は、昨年の夏一冊の本と出会いました。この本は、一人の少女が現代から昭和二十年にタイムスリップしてしまう話です。昭和二十年・・・
そうです。あの太平洋戦争が終わった年です。

皆さんは戦争について、どんな考えを持っていますか。私の中の「戦争」というのは、本当にくだらないもので、私達国民が反対すれば、戦争なんて起きないと思っています。でも、昭和二十年では、「戦争はよくない」と反対すると、ひどい目に遭わされてしまうような恐ろしい時代でした。本の主人公の少女も戦争について本当に無知で、「やっちゃいけないこと」と軽い気持ちで考えていただけだったのに、タイムスリップしたことで、あの戦争を体験し、多くの辛い目に遭うことになりました。そんな少女を支



えてくれたのが、一人の青年でした。その青年は心優しい人で、大切な人を守るために、特攻隊員に自分から立候補した人でした。特攻隊というのは、爆弾を積んだ飛行機で敵艦に体当たり攻撃を行った部隊のことです。

私は、中学二年生の時、アメリカ軍から見た特攻隊の映像を授業で見ました。アメリカ軍からの視点でしたが、敵艦に体当たりする時の恐怖心や体当たりされるアメリカ軍の恐怖心は、想像することができないほどでした。特攻隊に限らず、沖縄戦や原爆で亡くなった方々には、本当に色々な心残りがあっただろうし、誰もが死にたくないと思っていたと思います。

この本の中で、少女は特攻隊員の青年に、「生きてほしい」と伝えます。その思いも届かず、現代に戻った少女は、特攻資料館に行き、その青年から自分への手紙を見つけるのです。「本当は君を愛していた。」手紙にはそう書かれていました。この言葉が出てきた瞬間、私はとても心が苦しくなりました。また、「死ぬのが怖いという気持ちはとうに消えた」という言葉を見た瞬間、なぜか少し悔しい気持ちになりました。私はそれを、死んで



も良いという風に捉えてしまったのです。今を生きている人間にそんな考え方をさせてもよいのだろうか、と考えてしまったのです。どんな人にも自分の意志で生きる権利があつて、生きたいと願う権利があるということ、あきらめてしまったかのような青年の発言に、とても胸が痛くなりました。

昭和二十年の地獄から現代に戻ってきた少女は、性格が大きく変わっていました。人を大切に思えるようになった少女は、友達への関わり方も積極的になりました。生きたくても生きられなかった人達のことを考え、人を大事にしない同級生に腹を立てる少女。そこに、戦争で死んでいった人達の分まで、しっかり生きようとする思いが伝わってきました。

私は、この本を読む前、死んだら受験もしなくてもいいし、就職もしなくていい、怒られることもないし、死んだ方が楽なのかな、と思っていました。しかし、この本を読んで、しんどくて、気持ちが届かなくて、嫌な思いをしてきたからこそ、ポジティブに考えることができるし、辛い事が



あつても乗り越えて行けるんだなと思いました。

私の最初の戦争に対する思いは、ただくだらないもの、という軽いものでした。けれど、今は、人の生きる権利を無理やり奪い、多くの人々の尊い命を奪った戦争に、とても腹が立ちます。私は、戦争を最大の人権侵害というふうに捉えています。人権侵害というのは、正当な理由、もしくは、手続きなしに個人の自由を奪ったりすることを言います。正当な理由があったのかどうかは分かりませんが、「生きたい」と願う人々の命を簡単に奪っていった戦争は、絶対に繰り返してはいけないことのひとつだと、私は思っています。

また、私はこの本から、楽しい日々は永遠に続くわけではないということや命の尊さを、改めて実感しました。大切な人達がいて、今、その人達と距離ができてしまったら、そういう時間はとてももったいない時間なのだという考え方ができるようになりました。そして私達が「普通」のこととして言ったりしていることは、戦時中の人達からしたら、とても幸せな



ことだったり、殺されてしまうようなことかも知れません。例えば、家族と一緒にいること、温かいご飯が食べられることは、今の私達にとっては「普通」のことです。しかし、戦時中の人々にとって、それがどんなに幸せなことなのか。私はそれをこの本を通して知ることができました。これから先、今私達が普通にしていることが、いつ失われるか分かりません。そして、今共に過ごしている人達との時間は、永遠に続くとは限らないのです。

だから私は、今の時代を守るために戦争で亡くなった青年達や、犠牲になつた多くの人達の分まで、今を大切に生きたいと思います。